

八重山諸島家族旅行

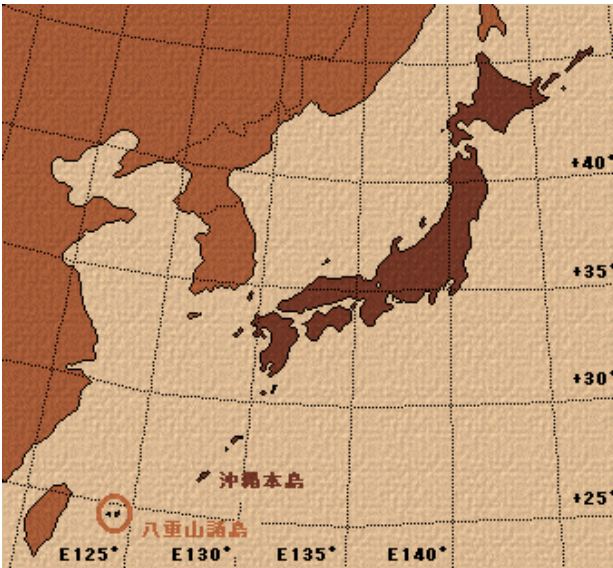
右城 猛

まえがき

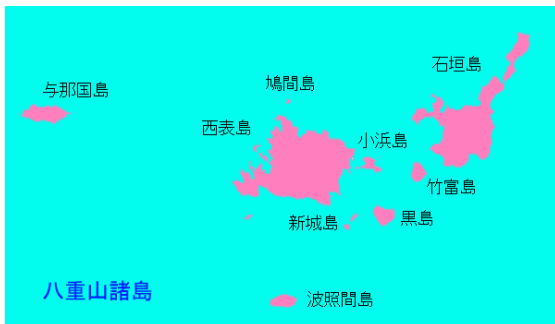
2011年10月9日からの3連休に阪急交通社高知営業所が企画していた「JTA チャーター便で行く美しき秘境・八重山諸島巡り3日間」を利用して、家族旅行をしてきた。

日本の最南端に位置する八重山諸島は、有人島12、無人島20からなる島であるが、今回のツアーで訪れたのは石垣島、竹富島、小浜島、西表島、由布島の5島である。

土佐電トラベル、高知新聞観光、タビックス、読売旅行、阪急交通社の5社が共同で企画したもので、150人乗りのボーイング737-400は満席であった。チャーター便は相変わらず人気が高い。



八重山諸島の位置(AKITAYA - Hiroshi 氏の HP より)



八重山諸島

日程表

1日目 10月9日 (土)	高知龍馬空港 8:40 石垣空港 10:50 石垣島鍾乳洞見学と昼食(八重山そば定食) 石垣港から船で竹富港 水牛で竹富島を観光 竹富港から船で小浜港 小浜島観光 小浜島泊 琉球式赤瓦屋根のコテージ 夕食は和・洋・琉ビュッフェ
2日目 10月10日 (日)	ホテル 8:00 出発 小浜港から船で西表・大原港 美原で水牛車に乗る 星砂の浜を散歩 西表サンクチュアリーリゾートニラカナイで昼食 西表島観光 仲良川マングローブクルーズ 西表島泊 15:30 着 曇色は八重山御膳
3日目 10月11日 (月)	ホテル 10:10 出発 上原港から高速船で石垣港 石垣島観光 伝統織物みねや工房、「和琉ダイニングみふね」で豚しゃぶの昼食 川平湾でグラスボートに乗船(40分)、琉球真珠の店(黒蝶真珠) 石垣空港(15:00) 那覇空港 16:50/17:30 高知龍馬空港 19:20 着

石垣島と鍾乳洞観光



高知龍馬空港を飛び立って2時間10分後の10時50分、石垣空港に到着する。湿気が異常に高くムツとする。

阪急旅行社のツアー参加者は50名。2台の大型バスに分乗して、最初の見学地である石垣島鍾乳洞に向かう。途中、歌手の夏川りみさんの自宅を車窓から見物する。



空港から 15 分で昼食場所の石垣島物産館に到着する。石垣島鍾乳洞の入口は物産館の傍にある。

昼食は八重山そば定食。八重山そばを食べるのは初めてであった。日本そばとは全く違う。ラーメンとうどんの中間のような麺。特段に美味しいとは思わなかったが、毎日食べていると癖になりそうな味であった。



鍾乳洞の看板の前で記念撮影



鍾乳洞への入口。八重山諸島では、ハイビスカスとブーゲンビリアの花が年中咲いている。



鍾乳洞に入って最初に目に入ったのは「秘宝の泡盛」と書かれた看板。「泡盛」を壺に入れて醸成させていた。看板には、『琉球の酒「泡盛」はウイスキーと同じ蒸留酒で、低温でねかせればねかせるほど風味が増して旨い酒になります。昔から3年以上経ったものは古酒「コース」と呼び結婚や子供の誕生記念などに泡盛を保存する風習があります』と説明が書かれていた。



「石柱の誕生」と命名されている場所。太い石柱があり、長い年月をかけて石柱ができていく様子を想像することができる。



鍾乳洞では全国唯一の水琴窟(すいきんくつ)。鍾乳洞をしたたり落ちる水滴の音が、まわりの石や壁に共鳴して様々な音色を聴かせてくれる。



入口から 220m、出口まで 440m の位置にある仙境の広場。



イルミネーションが飾られていた。鍾乳洞にイルミネーションを飾ったのはここが世界初。



神秘的な地下の水を溜めた「長寿の湖」。



「落ちてたまるか!」(受験石)。ユーモアがあって親しみやすい鍾乳洞である。



トトロ口にそっくりの鍾乳石。その名もトトロ。標識には「トトロと記念撮影しましょう」



入口から 510m の所にある「神々の彫刻の森」。小さい球状になったケイフハールと呼ばれる鍾乳石や泥が床から伸びた泥筍(でいじゅん)が見られる。

珊瑚から生まれた石垣島鍾乳洞は全長が 3.2km。その中の 660m が公開されている。



竹富島へ渡る高速艇の出航まで時間に余裕があったので、商店街「コーグレナ・モール」で暇を潰す。商店街の中には、石垣市公設市場があり、鮮魚店では色鮮やかな熱帯魚が売られていた。



「棧橋通り」と「市役所通り」の交差点を「730(ナナサンマル)交差点」と呼び、モニュメントが設置されている。沖縄が本土に復帰して6年後の1978年(昭和53年)7月30日に道路交通法が一斉変更された。その歴史的な日を指している。それまでは「人は左、車は右」であったが、この日を境に、本土と同様に「人は右、車は左」へと移行した。

竹富島(たけとみじま)

竹富島は、石垣島からは6.5kmの距離にある5.4km²の小さな島。島の中央部にある集落が、木造赤瓦の民家と白砂を敷詰めた道という沖縄古来の姿を保っており、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。人口は326人(2011年9月)、戸数174所帯。



有限会社竹富観光センターに到着。



石垣島離島ターミナルから竹富島に渡る。所要時間は15分。



これが名物の水牛車。



港の奥に見えるローゼ橋は、サザンゲートブリッジ。石垣島と沖合の人工島を結んでいる。



水牛車に乗って、赤瓦の町並みを観光する。



水牛を操る牛方。三線(さんしん)と呼ばれる沖縄の三味線を弾きながら、「安里屋ユンタ」(あさどやユンタ)という八重山諸島に伝わる琉球民謡を歌ってくれた。

サァ 君は野中の茨の花か サァユイユイ
暮れて帰れば ヤレホンニ 引き止める
マタ ハーリヌ チンダラ カヌシャマヨ

琉球王国時代の竹富島に実在した絶世の美女・安里屋クヤマと、王府より八重山に派遣されクヤマに一目惚れした目差主(みざししゅ。下級役人)のやり取りを面白おかしく描いた歌である。



赤瓦の民家と石垣が特徴的な竹富島の集落



ハイビスカスに似ているが、花の中に雄しべと雌しべがない。アラマンダという花。



赤山丘から眺めた竹富島の西部部落の風景。

小浜島(こはまじま)

小浜島は赤瓦の民家、そしてサトウキビ畑が広がるのどかな島。人口は489人。面積は竹富島より1.4倍広い7.8km²。島の面積の1/5を小浜島リゾート&スパニラカナイが占めている。



竹富島港から16時45分発の高速フェリーで小浜島港へ。所要時間は20分。



NHKの連続テレビ小説「ちゅらさん」で、ロケに使用された民宿「こはぐら荘」の建物。家の入り口には、「ひんぷん」と呼ばれる目隠壁がある。



「こはぐら荘」は、観光名所になっている。



ビュッフェ形式の夕食



「ちゅらさん」の撮影場所となった「はいむるぶしビーチ」。沖縄地方の方言である「南群星」（はい・むる・ぶし）は、南十字星を中心とした南に群れている星を意味している。



建物や彫刻はバリ島に似ている



宿泊は、南西楽園小浜島リゾート&スパニラカナイが経営するニラカナイカントリークラブの中にあるガーデンヴィラ。ヴィラとは上流階級の人々が田舎に建てたカントリー・ハウスのこと。宿泊した部屋。リゾートホテルとしても利用できるようにゆったりとした作りになっている。



レストランハウスの正面



小浜港。ここから西表島の大原港へ出発する。

西表島(いりおもてじま)

西表島は八重山諸島最大の島。面積は 289km²、周囲 130km。人口 2,272 人(2011 年 9 月)。大部分が亜熱帯のジャングルで、マングローブ林や亜熱帯性の木々が生い茂っている。

大原港から海岸線に沿った県道を貸切バスで北に走る。島にはバスガイドがないので、運転手が兼務しているということであったが、ユーモアたっぷりな話術は抜群であった。

西表島には、世界中でここにしかないイリオモテヤマネコが生息している。特別天然記念物として保護されているが、生息数は 100 頭以下と少なく絶滅危機の状態にある。

毎年数頭のイリオモテヤマネコが交通事故にあっていることから、道路標識や動物用トンネル、ゼブラゾーン(振音舗装)、幅広側溝、片勾配側溝の設置などの保護対策が進められている。



道路を走行中、何カ所かで「イリオモテヤマネコとびだし注意」と書かれた道路標識を見かけた。この標識は、ヤマネコが出没した箇所を設置しているので毎年増えているそうである。



仲間橋の親柱にイリオモテヤマネコの像

由布島(ゆぶしま)

由布島は、西表島美原の 400m 沖合にある面積 0.15km²、周囲 2.0km の小さい島であるが、島には亜熱帯植物だけでなく、ヤシガニやインコ、イノシシなどの動物も飼育されている。



美原と由布島の間は浅瀬になっているので、観光客を美原で水牛車に乗せ、牛方が三線を弾き、「安里屋ユンタ」を歌いながら由布島に渡すのがここの観光名物になっている。

所要時間は約 15 分。潮風を感じながらのんびりと水牛車に揺られていると、とてもどかな気分になる。



水牛を飼育している池



再び水牛車に乗って美原に戻る。

ここの砂はとても固く締まっている。水牛車が通っても轍(わだち)ができない。

潮が退けば、能登半島の千里浜(ちりはま)ドライブウェイのように砂浜を自動車が走ることもできると思われる。

砂浜が固く締まっているのは、砂の粒子が非常に細いためなのか、珊瑚礁であるが故に砂粒が特殊な幾何学的形状をしていることにあるのか研究する価値がある。



美原から西表島の最北端に位置する「星砂の浜」に向かう途中、木に止まっているカンムリワシをバスの運転手が見つけた。カンムリワシも国の特別天然記念物。西表島には200羽ほど生息しているといわれている。



由布島の亜熱帯植物園。園内を歩いていると、カマキリやカタツムリなど子供の頃によく見た懐かしい虫に出会った。

星砂の浜

星砂の浜は、西表島の最北端にある。星砂の浜に到着した頃には雨が少し降り出し、砂浜が湿った状態になっていた。



砂の中から砂金を掘り出すように、必死になって星砂を探している。



我が家では怜佳さんがいち早く星砂を発見。八重山の白い砂浜は、そのほとんどが珊瑚や貝などの生物の死骸でできている。星砂も、海草などに付着して生活している有孔虫の骨格が、波などで砂浜にうちあげられたもの。骨格が星の形に似ているため、星砂と呼ばれている。

写真は、手のひらについた星砂を撮ったものだが、1mm弱なので目を凝らしてみないとわからない。



星砂、太陽の砂...、扁平な砂？
(インターネットによる)

仲良川(なからかわ)マングローブクルーズ

ホテルニラカナイで昼食の弁当をゆっくり食べて、仲良川に行く。仲良川は県道の西の終着点、白浜集落のすぐ西に位置する川。西表では、浦内川、仲間川に続く3番目に大きい川。



15時、土砂降りの雨の中をマングローブクルーズに出発。



雨の水滴で前が見えなくなるので、若い女性がときどき外に出て、フロントガラスをワイパーで拭いていた。



窓に水滴が付いてマングローブは全く見えない。



船の後部にはシートが張られていないので外が見える。



雨が小降りになってきたのでビニールシートを巻き上げてマングローブを鑑賞。



オヒルギというマングローブの群生



パイナップルのようなアダンの実。食べられなくはないが美味しくない。



ヤエヤマヒルギというマングローブの群生



マングローブにも少々飽きてきた頃、乗組員の女性が三線を弾きながら、「安里屋ユンタ」や「涙そうそう」など八重山に関係した歌を披露してくれた。

マングローブクルーズは所要時間1時間半であったが、少し長すぎる。



メhilギというマングローブの群生



二日目のホテルは、「星砂の浜」の近くにあるホテルニラカナイ。初日のホテルと経営者が同じ西表なので部屋の作りもよく似ている。



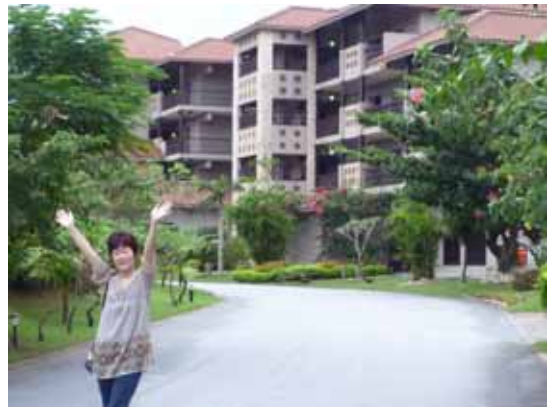
夕食は八重山御膳。メインディッシュは、黒毛和牛である石垣牛のステーキ。柔らかくてとても美味しかった。



ホテルの裏にはプールがあった。最後の日のホテル出発は10時10分。時間がたっぷりある。水着を持って来なかったのが残念。



朝食の前にホテル周辺を散策。ホテルの正面。



ホテルの裏は、ウミガメが産卵にくる砂浜。



朝食はビュッフェ形式であるが、料理がとても美味しい。

再び石垣島

西表島北端にある上原港から10時20分発の高速船サザンキングで石垣港へ。所要時間は50分。



石垣港からは、初日と同じ(株)かびら観光交通のバスに乗って観光。案内役は、4年前に都会からUターンしてバスガイドになったという立津かおりさん。ガイドをするために生まれてきたように明るく、聡明で話術が巧みな31歳の乙女。

次々によくこのように知的なジョークが飛び出すものだと感心させられどうしであった。



昼食は、「なみね屋工房」で豚しゃぶ料理。なかなか美味しかった。

この店は「みんな一織」の専門店で、八重山観光に来たツアーのほとんどはこの店に寄って昼食をとり、ショッピングをしているようであった。

店の入口の予約客を書いた案内板には、高知からのチャーター便で来たと思われる土佐電トラベル、高知新聞観光、タビックス、読売旅行の名前も記されていた。

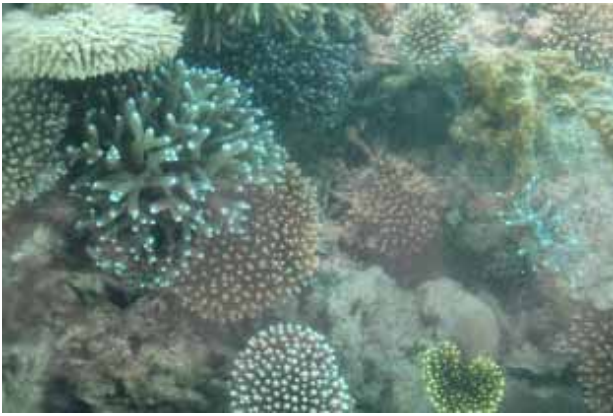
川平湾(かびらわん)

最後の観光地は、石垣島の北西部にある川平湾。湾内の海は、光の加減や潮の満ち引きにより刻々とその色を変え、石垣島を代表する景勝地と評されている。

湾口をふさぐように横たわる小島(くじま)をはじめとする小さな島が湾内に点在し、海中には数多くの種類の造礁サンゴが群落を形成している。湾内では世界的にも珍しい黒蝶真珠の養殖が行われている。



14時、グラスボートに乗船。



石垣島には、250種類にも及ぶ色とりどりの珊瑚が生息している。



大きなシャコ貝が海底で動いていた。



グラスボートの船長は、若い男性であったが、船を操りながら辛口のジョークを飛ばしながら海底の珊瑚礁や熱帯魚の説明をしてくれた。

話術も素晴らしいが、珍しい珊瑚が生息するジャストポイントに船を移動させて停止させる技術は神業のように思えた。それにしても八重山の人は皆さんユーモアに溢れ話術に長けている。



14時30分下船。これで八重山観光は全て修了。バスに乗って石垣空港に向かう。

あとがき

今年は、日本列島を揺るがす3.11地震、それによる津波と原発事故、初孫となる祐希の誕生、義父の卒寿と義母の米寿、膀胱結石の手術、親の介護問題などいろいろな出来事があり、これまで旅行を楽しむ余裕がなかった。ここにきて、ようやく落ち着き、家族旅行をすることができた。

今回の旅は国内であったが、海外へ行ったような贅沢な気分を味わうことができた。ホテルの部屋はゆったりとして使い勝手が良く、料理はとても美味であった。日程にゆとりがあり日頃の疲れを癒すことができた。心配していた天気も大したことはなく、ほぼ満足できるものであった。

ツアーに参加された皆さんは、とてもマナーが良くて親切であった。阪急交通社の添乗員の坂本誠治さんの気配りも素晴らしかったし、現地のガイドの説明はユーモラスで分かり易かった。

私たち家族にとって思い出に残る楽しい旅行となった。

お世話になった皆さんに心より感謝申し上げます。